

## 杜甫「曲江二首」

報告：花岡風子

「古稀」という言葉が「人生七十古来稀なり」という言葉から来ているということをご存知の方は少なからずいらっしゃるはずです。しかし、この出典が杜甫の『曲江』という詩だということはあまり知られていないようですね。私も今月のお題で初めて知りました。

今回もいつものように、作者の人生とその時代背景から植田先生の講座が始まりました。「杜甫の詩は、当時の歴史的背景を知ってから読むと、また感慨が深まりますね。そこが李白とは違うところですね」と植田先生。

杜甫が生きたのはまさに動乱の時代。歴史に翻弄されながら、人間関係の複雑な渦に巻きこまれ、その時々で様々な想いを詠んでいるのですが、その背景に何があり、杜甫その人の身に何が起こっていたかを知ると、原詩の一字一句が作者の想いと重なり、作品自体がリアリティをもって迫ってきます。

この詩は「安祿山の乱」後の荒れ果てた都の様子を嘆いた、かの有名な『春望』を書いた翌年、758年の作品だそうです。杜甫は元々、玄宗皇帝のもとで理想の国づくりをしたいという野望を持っていましたが、玄宗に接近する手立てもなく、極貧の生活を送っていました。その最中に安祿山の乱がおこり、玄宗皇帝は蜀に避難します。それを受けて太子李亨（りこう しゅくそう 肅宗）が帝となると、いち早くその即位の地、れいぶ 靈武へ駆けつけようとしています。しかし途中で捕らえられて都へ連れ戻されました。長安の荒廃ぶりを目の当

たりにした杜甫は「国破れて山河あり…」と詠んだのでした。そしてそのひと月後、再び懸命の脱出を試み、新たに肅宗の行在所となった鳳翔ほうしょうの地に駆けつけるのです。そんな健気な杜甫の行動に感激した肅宗は杜甫に左拾遺さしゅういという役職を与えます。これは、のちに白居易が若きエリートのところ務めた役職です。地位は低いものの、皇帝に誤りがあれば直言して諫めるという役割です。杜甫のようなノンキャリアとしては、最高の位といえます。ところが長安に復帰した後、安祿山の乱で敗戦の罪を着せられた房琯ぼうかんを弁護したために、肅宗の怒りをかってしまうのです。「言ってもいいぞ、と言われて、本当に言うと嫌われる。そういう理不尽なことは今の世の中でもあるようですね。」と植田先生。

この背景には親子の骨肉の争いと、派閥間の利害が絡んでいたのです。房琯は玄宗皇帝の派閥に属する学者肌の人間でした。彼は乱発生当時、宰相の地位にありました。そして自ら軍を指揮して惨敗を喫しています。玄宗皇帝は安祿山の乱で、しぶしぶ退位はしたものの、息子に帝位を奪われたことを面白く思っていないのでした。ですから、息子の代になったとはいえ、宮廷内では、玄宗派と肅宗派の二つの派閥が水面下で互いに綱引きしていた、という複雑な事情があったようです。杜甫が房琯と親しく、また父玄宗に心酔していたことを肅宗は知っていましたから、彼の直言がイチイチ面白くありません。杜甫にしても、いくら進言しても聞き入

れてもらえないので、次第に仕事に対する熱意を失っていきます。また、肅宗は玄宗皇帝のように詩文や芸能を愛した文化人タイプでなく、職能を重んじる現実主義者でもありました。良く言えば、父がダメにした国を何とか立て直そうとしていた真面目人間だったのかもしれませんが。

一方、杜甫は杜甫で、厚い忠誠心から懸命に肅宗に仕えたものの、凶らずも派閥抗争に巻き込まれ、やる事なすことうまくいかない。『曲江』はそんな最中に書かれた詩だったのです。

さて作品はといえば、前半と後半でガラリと詩風の変わる新鮮な構成をとった七言律詩です。この詩形は杜甫が最も得意としたジャンルでもあります。

第一句、季節は晩春、「朝廷から帰ると、使い古した春の衣装を毎日質に入れる」という、一瞬ドキッとさせるような、結構インパクトのある出だしです。二句目は、「毎日、酔い潰れて帰る。」三句目は「酒場の借金は当たり前のように、行く先々で増えていく」というそして、四句目に「この人生、七十まで長生きすることは滅多にないのだから、今のうちにせいぜい楽しんでおきたいのだ」という意味あいを含めた名セリフ「人生七十古来稀なり」が来るのです。そして、この句を境に、詩風はガラリと変わり、素晴らしい自然描写が連なります。

五句目、「蜜を求めるアゲハチョウの群れが、花むらの奥の方に見え隠れする」、六句目は「水面に軽く尾をチョンチョンとつけながら、トンボたちがさも楽し気にスイスイと飛びまわっている」。

そして七、八句目にはまた屈折があって、作者が自然を相手に話しかける形になっています。「私はこの自然界に対して我が意を伝えたい。そなたも私も時とともに流れていくのだから、しばしの間でも共に仲良く、互いの心にそむくことのないようにしようではないか……」と。

前半は、ストレスをかかえて、毎日ヤケ酒。呑んでくれて、あちこちで借金を繰り返すダメ親父の姿が目浮かびます。「杜甫はね、14歳で酒を飲んでいたので、今だとアウトですよ。洛陽の名士たちと酒を飲んで詩を作っていたわけですから……。まさに天才少年ですよ。ま、青少年諸君はマネしちゃいけませんけどね。」と植田先生。そんな頃から飲んでいたのですから、強いことは間違いないでしょうけど、あちこちで借金するほどの呑べえだったんですね。中国語で酒量の大きいことを「海量」と言いますが、杜甫に関してはこの表現も大袈裟ではなかったかもしれないな、と思っていると植田先生が「完全にアル中、少なくとも依存症だったと思いますよ」と仰ったので、なるほど、と納得しました。

役人としての地位は低く、給料も安かったので、衣裳を質入れしても酒代は到底払えなかったのでしょうか。肅宗の下で、相当なストレスを抱えていたものの、この時期、王維などの友人達と交流も出来たので、杜甫の人生のなかでは、どちらかといえば幸せな時期だったかもしれません。

qū jiāng èr shǒu qí èr  
 曲 江 二 首 其 二  
 dù fǔ  
 杜 甫

cháo huí rì rì diǎn chūn yī  
 朝 回 日 日 典 春 衣  
 měi rì jiāng tóu jìn zuì guī  
 每 日 江 头 尽 醉 归  
 jiǔ zhài xún cháng xíng chù yǒu  
 酒 债 寻 常 行 处 有  
 rén shēng qī shí gǔ lái xī  
 人 生 七 十 古 来 稀  
 chuān huā jiá dié shēn shēn jiàn  
 穿 花 蛺 蝶 深 深 见  
 diǎn shuǐ qīng tíng kuǎn kuǎn fēi  
 点 水 蜻 蜓 款 款 飞  
 chuán yǔ fēng guāng gòng liú zhuǎn  
 传 语 风 光 共 流 转  
 zàn shí xiāng shǎng mò xiāng wéi  
 暂 时 相 赏 莫 相 违

ちょう かえ しゅん い てん  
 朝より回りて日日春衣を典す

こうとう  
 毎日江頭酔いを尽くして帰る

しゅさい じんじょう  
 酒債は尋常行く処に有り

こらいまれ  
 人生七十古来稀なり

きょうちようしんしん  
 花を穿つ蛺蝶深深として見え

てん せいてい かんかん  
 水に点ずる蜻蜓款款として飛ぶ

でんご とも るてん  
 伝語す風光共に流転するに

あいしやう たが なか  
 暫時相賞して相違ふこと莫れ

今回は一首だけ、ということもあり、何度も読みの練習を繰り返しました。漢字の読みは基本的に一字一音ですが、多音字もあり、読みと意味が違うものもあります。一句目の「朝」は、zhāo と読むと、「朝」、cháo と読むと、「朝廷」とか「王朝」、また動詞で cháo と読めば「対面する」、「向かう」という意味になります。「これ、

最初読んだとき、朝帰りの詩かと思ったんですよ。でも、朝だとそんな早くに質屋はあいていないし…」と植田先生がおっしゃったので一同大笑い。こんなお話しを聞くと次回から読み間違えることはなさそうです。当時の歴史的背景や、宮廷ドラマを思い描いた後の音読では、作者の気持ちになりきったつもりで鑑賞ができるのが、この講座の醍醐味です。やけっぱちの後には、人間世界の悲喜交々をしり目に淡々と、移りゆく自然界に目を向ける杜甫。そしてそこに時空を超えた新境地が広がります。人間関係に疲れ果て、自然界に心の救いを求めるその姿は、なんだか現代でもありそうなことですよ。

杜甫は左遷された後、ついに官を棄て、各地を転々と流浪した挙句、古希には程遠い、満58歳で人生を終えました。「私もね、若い頃は七十歳というとなんでもないお爺さんに思えましたけど、自分がそうってみるとあっという間で、古希もとつと過ぎてしまいました」と植田先生。アラフォー女子もあと、2年で五十の大台に乗ります。年々、時間が加速しているのではないかと思うほど、飛ぶように日々が過ぎていく今日この頃。もし幸いにして古希を迎えることが出来たなら、やはりあっという間に終わってしまったと感じることだろう、とすんなり思えるところに、40代後半を感じるのでした。



杜甫。清宮殿蔵本  
 (Wikipedia より)